

【聖書】

『12 イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。13 イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。14 イエスは厳しくお命じになった。「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」15 しかし、イエスのうわさはますます広まったので、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気をいやしていただいたりするために、集まって来た。16 だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。17 ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。18 すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。19 しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。20 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。21 ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほか、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」22 イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。23 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。24 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。25 その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。26 人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。』

【説教】

今日の聖書の言葉は、イエスさまが2人の病人を癒されたところが記されています。最初の人の方は重い皮膚病が癒され、もう1人の方は体の機能が麻痺していた病、中風の病が癒されました。これは、文字通りイエスさまが身体的な病を癒されたというお話であります。ただ、体の疾患を治すというだけでなく、もっと大きな意味での病をお癒しになった聖書の言葉としても受け取れると思われれます。私たちは、イエス・キリストにはなれませんので、教会で祈ればどんな病気もたちどころに治るということはあまりないでしょう。しかしそれでも、より包括的な意味での人間を苦しめる病は、今でも癒されるものだと受け取ることが出来ると思います。

心と体は深いところにつながっているということは、私も実感としてよくわかることです。心が癒され解放されて、いろんな意味での苦しみが癒されることは起こることだと実感しています。そのような意味でまずこの聖書箇所の中で注目したいと思うのですけれども、それは、この2人の病人がどこに住んでいたのかという所です。彼ら二人が住んでいたのは、「町」だったとあります(12節)。もちろんですね、町に住んでいたから病気になったと一面的に言おうとしているわけではありません。しかしそれでも、町に住むことに何かしら病気を誘発する要因があるのではないかということです。イエスさまのこの時代は、大きな社会的な変動がありました。多くの移民がイエスさまたちの住むこのガリラヤ地方の近くのゲラサとかガダラという町にもやって来ていました。そして、イエスさまがお育ちになられたナザレの村の近くには、セツフォリスとかティベリウス

という外国風の都市が建設されていました。それらの町は、生き残りをかけて自分たちの町に沢山の人々を集めていました。セッフォリスやティベリウスでは、ローマ・ギリシア風の大きな建物を競うように造っていましたが、大工のせがれだったイエスさまも若いときにこれらの町々に出稼ぎに行っていた時期があったかもしれません。競争を勝ち抜くためには、町は労働者をたくさん集めることと、そしてそこで流通する商品を買う人々も必要です。町は大きければ大きくなるほど人間でゴった返すことになります。人が多くなれば下水や汚物の処理などの衛生面の整備をしっかりと行わなければ、住民はとたんに感染症の危機にさらされます。しかし、下水道などあるはずもなく、上へ上へと2階3階と高く建てた建造物の窓から、住民は糞尿を下に捨てていたのです。これで病気にならないほうがよっぽど不思議ですよ。

また、過度な多すぎるストレスということも、病を誘発する一つの要因として考えられると思います。人が多くなればそれだけたくさんの関わりを持つことになります。1人でも良好な関係を保とうとすれば、大変心を繊細に使わなくてははいけないと思います。それが沢山になればなるほどその努力は際限ありません。どんなに健康な心を持った人でも、だんだん疲れて来てもう対応しきれないとなってしまうのではないのでしょうか。心と体というのは別々のものでなく、深くつながっていますね。神経をすり減らし、免疫力を低下させて行くと、心も体も健康に保つことがどんなに難しいことなのかよくわかることだと思います。

このような話を聞きました。それは、地方から都会に移住した女性の話です。その女性は都市部の大学を卒業後、そのまま就職しました。しかしその給料は都会での生活に見合うものではありませんでした。地方よりも給与は高いかもしれませんが、そのかわり物価も高いですね。生活して行くにはとても余裕はありません。特に出費を重ねたのは、毎月行く美容院のお金と、その時流行っている洋服やバックを買う事でした。何も周りの人々より、より上の方になろうとしたわけではありません。しかし、周りの同世代の人より下回ることだけは出来なかったと思います。自分を真ん中よりも少し上の位置に保つこと、「中の上」を維持することが、その女性にとってとても大切なことだったのです。彼女は、その「中の上」を保つため、にいつの間にか借金をするようになりました。借金がとうとう100万円を超えたところで、それを返すために、また「中の上」を保つために、夜の水商売を始めました。昼間の仕事と夜の仕事で段々疲れ果てて行き、結局その女性は病気を患い、会社を辞めて田舎に帰って来たということです。

この女性に起こったことを、今日のこの聖書の言葉で言ってみますと、彼女が必死で守ろうとしていた「中の上」の位置というのが、ちょうど「清さ」(12 節)と「汚れ」を分ける境目だったのだと言えないでしょうか。清い領域に入るものだけが町で生きる資格があるのであり、それ以外は汚れた存在としていらぬという無言のプレッシャーを感じていたのではないかと思います。町が好んで必要としてくれるのは、よく働く人と商品やサービスをたくさん買ってくれるお金を持っている人の方です。病気になって働けなくなったり、お金も持っていなければ、町は自分を必要としてくれない。そう敏感に感じ取り、何とか生存競争に生き残ろうと、汚れの領域に入らないように必死に彼女は頑張ったのだと言えないでしょうか。イエスさまの当時も、今も、清い者だけが尊くて、それ以外は汚れた者として軽んずるというその人間の心のあり方こそが、私たちの心を蝕み、体を痛めて行く大きな要因になっているのだと思われまます。「私を清くして頂きたい」というこの願いは、汚れているとされた者たちの切実な心の叫びを代表しているように思われまます。

しかし、本当は、病気になった人や働けない人が汚れているわけではありません。それらの人を汚れているとする人間の心の方が、汚れているのです。イエスさまがここで清められたのは、その本当の意味での人間の心の汚れであります。イエスさまが、この重い皮膚病の人を癒したのは、まさにイエスさまの「心の清さ(マタイ 5:8 参照)」でありました。生き残りをかけて足手まといなる者を捨ててしまおうとする町に働くその汚れた霊の力(ルカ 8:29 参照)を癒やすには、この心の清さが必要です。その心の清い状態をイエスさまの弟子のパウロが、うまく言い表しています。

「目が手に向かってお前は要らないとは言えず、また頭が足に向かってお前は要らないとは言えません。それどころか体の中で外よりも弱く見える部分がかえって必要なのです。神は見劣りする部分をいっそう引き立たせ、体に組み立てられました。それで体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮しあっています。1つの部分が苦しめばすべての部分が共に苦しみ、1つの部分が尊ばれればすべての部分が共に喜ぶのです。(I コリント 12:21-26) 」

心の清さとは、弱っているところこそより慈しむという心のあり方のことですね。イエスさまがこの重い皮膚病の人に触れたその手は、神の癒しのみ手そのものでありました。人間によって汚れているとされて来たものを、神さまのふところに、内側に迎え入れてくださる慈しみの心を伝えるその手の温もりです。その神さまの慈しみが、この人を癒やしたのです。

もう1人の中風という病を患った人の癒しも、同じようなことがいえると思います。おそらくこの病気は、脳梗塞のような脳の血管を収縮させて起こる病気だったと考えられます。この場合も寒さなどの強い環境的なストレスだけでなく、恐れや不安などの心の苦しみが体の損傷に影響を及ぼすことがあるのだと考えられると思います。不安や恐れといった心の大きなストレスは、**万病の元**なのだと言えるのではないのでしょうか。イエスさまがこの中風の人を癒したときに用いたのは、神さまによってなされる「罪の赦しの宣言」(20 節)であります。私たちの人間関係を壊してしまったり難しくしてしまうのは、私たち人間の中にある罪の力があります。ですから、神さまによってなされる罪の赦しの宣言は、私たちをその罪の虜の状態から解放してください。これは、罪から解放されて行く道のりで、人と人のつながりを良いものに回復させることで、様々な心の痛みを取り除いて行こうとするものですね。そして特に罪の赦しは何よりも、神さまとの和解をもたらしてくれます。神さまとのつながりを回復することこそが、私たちがこの世界で不安や恐れから解放される最良の薬なのですね。世界のすべてを司っていらっしゃる神さまが、私たちの味方になってくださるのなら、何を恐れることがあるのでしょうか。死ぬことの恐れさえも取り除いてくださる、癒しの力が、この信仰には備わっているのです。神さまの罪の赦しは、私たちに永遠の命を保証してください。死んだ後の不安や恐れさえも、取り除いてくださるこの罪の赦しの宣言は、死を恐れる「死の病」さえも癒やしてくださるのですね。

しかし、一つだけ罪の赦しの宣言だけでは、癒やせない私たちの心を縛り付けている病があります。それは何かと言いますと、人間の感情の中で一番強く、しかもコントロールしがたいものですが、それは、怒りと憎しみの心の部分です。この怒りや恨む思いが、どれだけ私たち人間の心を蝕み、様々な人生の損失を生んでいるのかは、説明の必要はないと思います。様々な文学の題材になっていますし、映画やドラマでも主要なテーマとして扱われています。イエスさまは、この神さまによる罪の赦しによって私たち人間の治療を始められますが、より先に進むにつれて、最もやっかいなこの怒りと憎しみの病を癒す段階に取りかかられます。その一つは敵を愛しなさいという戒めによってと(ルカ 6:27)、もう一つは、主の祈りにおいてです(ルカ 11:4)。主の祈りでは、「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と唱えます。これは、神さまによる罪の赦しの宣言と、私たちによる他の人への罪の赦しが、密接に結びついているものでありますが、ここがイエスさまの治療の大きな特徴となるわけです。

敵対する人を愛したり、自分に危害を加えた人を赦すというのは、キリスト教の場合となく倫理的な清さや美談として扱われがちです。しかし、元々は罪の赦しも、主の祈りも、私たち人間の生きる上での苦しみから、いかに癒やされるかという文脈の中で出てきているものです。ですので、その本来の文脈に立ち返って、神さまによる私たちへの癒しのみ業の一環として聞くべきです。

私も覚えが沢山ありますが、怒りや憎しみをもち続けている限り心に平安がありません。過去に傷つけられた経験を赦すという事はなかなかできませんが、しかしこう考えるわけです。その相手に過去において

傷つけられた上に、今もずっと苦しめられているのであれば、結局その人に、昔も今もずっと苦しめ続けられていることとなります。そして、今後も、未来もそれが続いて行くのであれば、それはもう、人生のすべてをその人に台無しにされてしまうことになってしまいます。それはもう、本当にもったいないし、残念に思うのです。神さまが願われているのは、私たちの平安であり、健やかで喜びの多い命を送ることです。その悪しき者の道ずれになって、命を滅ぼす道から脱出できないのは、本当に悲しいことだと神さまは心を砕いてくださいます。

その憎い相手との闘いは、神に任せること。これが、怒りや憎しみの病から解放される最善の治療法です。神さまは、私たち人間の一人一人と向き合われ、その人々の中にある罪と戦闘われます。それは、私たちが恨みに思ったり赦せない相手にとっても同じことです。イエスさまによって執り成される罪の赦しの宣言を受け取れないこと自体が、もうすでにその人にとって裁きになっているのです。ここでは、ファリサイ派と律法の教師たちが、まさにその治療を拒絶する人々の代表として表れています(17,21)。彼らは、イエスさまによる罪の赦しの宣言を拒み、自らをまっくらな心の闇の中に置いてしまいました。彼らは、イエスさまによる罪の赦しの宣言を受け取らない限り、心に平安のない怒りや憎しみの病に冒され続けたつらい人生を送らなくてはなりません。それがもう、その人々が自ら犯した罪の報いとなっているのだということです。

またパウロの言葉ですが、こういうものがあります。

「愛する人たち。自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。と主は言われる。そうすれば、燃える炭火は彼らの頭の上にたまりにたまって、いつか落ちるであろう。だから、悪に負けることなく、善を持って悪に勝ちなさい(ローマ 12:19-21)」という言葉です。

まず、神のみ言葉に一番近い人々が、大きな意味での病から癒やされていなければ、十分に健康に神さまのお役目を担えないということもあります。それを抜きにしましても、悪人のために苦しむことから解放されて、神さまと和解した平安を十分に堪能していただきたいと思うのです。

この中風の人を担いでイエスさまのところに連れてきた人々のように、罪の赦しの宣言を受けるところまで、人々を運ぶ役目の人が必要とされています(18 節)。そのためにも、イエスさまは私たちを癒やして、元気にされようとなされます。このイエス・キリストの治療を、喜んで受け入れる者になりたいと願います。